

脳科学研究所講演会「社会的誘因の自己維持システムとしての文化」

2021年6月29日(火)にZoomを用いて脳科学研究所講演会「社会的誘因の自己維持システムとしての文化」をオンライン開催した。本発表では、これまで日本人らしさの一つであると考えられてきた他者との調和は、それぞれの個々人の心の中に根付いているわけではなく、他者が持つ信念を予想した結果として生まれた適応戦略であることを実験により実証した結果を大阪市立大学大学院准教授の橋本博文先生に報告していただいた。

(脳科学研究所 高岸治人)

〈開催日時〉 令和3年6月29日(火) 17:00～18:30

〈開催場所〉 Web開催 (Zoom)

〈講演者〉 橋本博文 (大阪市立大学大学院 准教授)

〈講演要旨〉

人間の心の働きや行動の特性に文化差が存在することは古くから指摘されているが、いったいなぜそうした文化差が生まれ、また維持されているのかという問いに対してはさまざまな考え方が存在する。本発表では、この問いに対する一つの答えを提示するため、文化の重要な側面として「特定の文化に身を置く人々の行動そのものが作り出す誘因構造(社会的ニッチ)」を捉え、そうした誘因構造への適応という観点から人間の心や行動の文化特定性を理解するための分析枠組みを紹介する。そして、この分析枠組みの妥当性を検討するための一連の実証研究を報告し、得られた知見をもとに、文化特異的な行動の多くは社会的ニッチへの適応行動として理解可能であること、そして人々が適応すべき社会的ニッチそのものも、文化的信念を共有する人々が生み出す行動と、その行動の集積として個人の前に立ち現れる誘因構造(まわりの人々からの予測可能な一貫した反応パターン)によって自己維持的に構築されている可能性を議論する。



結果

	日本人参加者	アメリカ人参加者	χ^2 検定
参加者自身の実際の振る舞い	48.0%	59.0%	$\chi^2(1) = 3.91, p < .05$
世間一般の人たちの振る舞い	8.0%	42.0%	$\chi^2(1) = 32.08, p < .001$
どちらのように振る舞いたいか	77.0%	80.0%	$\chi^2(1) = 0.26, n.s.$

*%は独立的な人物を選択した割合

Hoshimoto, H., & Yamagishi, T. (2015). Preference-expectation reversal in the ratings of independent and interdependent individuals: A comparison of participants from the United States and Japan. *Asian Journal of Social Psychology*, 18, 115-123.